紺糸威鎧　兜・大袖付　一領

【所　在　地】東京都台東区上野公園 13 －９　東京国立博物館
（姶良市隼人町　鹿児島神宮所有）
【種　　別】国指定有形文化財（工芸品）
【指定年月日】昭和 28 年３月 31 日

この鎧は,島津貴久時代の家老樺山幸久が鹿児島神宮に寄進したものと伝えられている。黒漆の盛上げ本小札を紺糸で威したもので，南北朝時代の作である。兜は極めて精巧なものであり，二十八間四方白小星の兜鉢で，◆（しころ）はやや笠◆（しころ）に近く５段を紺糸で威し，枝菊高彫りの鍬形台に大ぶりの鍬形を挿入している。また，この鎧は，胴丸や腹巻が盛んになりつつあった時代に作られた鎧であり，特に貴重なものである。

〈参考〉甲冑の用語（２）

●威毛　威という語は，小札の穴から穴へ革紐や組紐の緒を通す「緒通し」から生まれ，通した緒の並び方が鳥の羽毛に似ていることから威毛の名がある。威毛の色，文様，形等によって，赤糸威，白糸威，紫色威，黒糸威，紺糸威，萌黄威，沢瀉威，小桜威，色々威（３色以上の組紐で威したもので室町時代後期に流行した）等の名称がある。

●笠◆　鎌倉時代以前の◆（しころ）は杉形の裾拡りであったが，鎌倉時代後期になると◆（しころ）は笠のように裾を大きく開くようになった。太刀打ち戦の盛んな南北朝時代から室町時代に流行した。